

高天原の神々の御宣託 その二：高原山と人々の暮らし

和氣達郎（高原山神社宮司）＋高原山の自然を守る会（編集協力）

塩谷町を起点にして北を見渡すと、高原山の裾野は鶏頂山の中腹に位置する日光市高原地区や、男鹿（おじか）川左岸に広がる川治温泉高原へと連なっている。その裾野が生み出す豊かな水と土によって、冬の寒さは厳しくとも、連綿と人々の暮らしが営まれてきた豊かな地である。今回、この高原

山をめぐる有史以来の人々の暮らしを簡単に振り返ることで、長い時間をかけて高原山一帯は、「神々に守られた地」とも言うべき独自性をもつようになったこと、そしてその神聖な地に放射能汚染物質の処分場を建設することがどれほど愚かなことかを考えてみたい。



【写真 1: 高原山麓を流れる尚仁沢にたたずむ古木】

太古の時代、人々は存分に自然の恵みに与り、四季の移ろいの中で時には厳しさに耐えながらも、安穏な生活に感謝する暮らしを送っていた。大量消費型の経済によって、いつの間にか人々が自然に対する感謝の感覚を喪失してしまった現代とは異なって、きっと森羅万象すべてに神々が宿って

いた時代だったのだろう。

高原山の水源から流れ出る、塩谷町の東を流れる東荒川によって形成される沃地の先端に位置する鳥羽新田地区の箒根（ほうきね）神社遺跡（後期旧石器時代）の調査では、黒曜石の産出地として全国的に知られる北海道十勝岳周辺や信州八ヶ岳周辺など

と並んで、この高原山産の黒曜石も周辺各地で利用されていたことが判明している。房総や横須賀に至る関東平野の南方で、高原山の黒曜石が装飾品や祭祀具、あるいは工作具として利用されていたことが多くの遺跡の出土品調査によって明らかとなっている。高原山麓の一带の豊穡さ、その豊かさ



を求めて遠隔地から人々が訪れていたことが理解できるだろう。戦後、高原山への入植が進められた際には、縄文期とみられる土器も出土しているように、この高原山の自然は石器時代、縄文・弥生時代から現代に至るまで、人々の生活に深く関わり続けてきたのである。



【写真 2: 一般には佐貫観音として知られる、「佐貫石仏」(弘法大師作とされる大日如来磨崖仏)の足下には、縄文時代の形跡を伝える「佐貫洞窟」がある。洞窟中に確認された祠堂は、祭祀を伴った文化的生活が営まれていたことを示している】

前回に触れたように、奈良・平安時代になると、この塩谷の山間地にも寺社が建立され、信仰の地として多くの人々を惹きつけるようになった。11世紀半ば、(下野)宇都宮氏が塩谷の南に位置する宇都宮大明神(現在の宇都宮市二荒山神社の別称)の別当職となった。それ以降、22代500年にわたって毛野川(現鬼怒川)流域一帯を支配した宇都宮氏の繁栄を支える北の要衝として、塩谷町の三つの地区に山城が建てられた。その一つが、現在の寺島地区に設けられた寺島城であり、高原山の祭祀だけでなく山林や鉱山の管理も宇都宮氏によって行われていた。

その後宇都宮氏が断絶して、江戸時代に新たに宇都宮藩が設置された。奥平氏や本多氏、戸田氏などと藩主が目まぐるしく変わっても、高原山一帯が宇都宮藩にとって城下の都市生活を支える重要な地であったことは古文書の解読を通じて明らかである。宇都宮藩の時代には、あらためて寺島には寺島番所が設けられて高原山の管理に当たった。薪や炭などの燃料や建築材、そして山菜や鹿や熊などの獣肉といった山幸などの産地であることに加えて、ときには藩主の狩場としても、塩谷の山間地は都市部の生活に欠かせない役割を担っていた。



【写真 3:1254(建長 6)年築城の玉生(たまにゅう)城跡遠景(要害山)。862(貞観 4)年創建の伯耆根(ほうきね)神社が、1907(明治 40)年に近隣からこの山頂の城趾に移されている。塩谷町「ほうきね 6 社」のうちここだけを中世期の当村の城主玉生伯耆守の高徳を讃えて伯耆根とし、その他は籌根と表記する】

時代は変わって明治以降、高原山一帯は国有林や県有林、あるいは町有林や民有林として権利上は分割されたが、薪炭や木材、山菜の供給地であることに変わりはない。高原山麓に発する西荒川の源流域、名水として名高い尚仁沢湧水に近接する処分場建設候補地の近くに「官行」という地名が残っている。戦後しばらくは、大正時代の官行造林法(大正 9 年法律第 7 号)に基づき林野庁が管理していた山、つまり官行造林地の山林労働に人々が従事し、トロッコを使って木材を船生(ふにゅう)の長峰荷扱所(前回言及した「矢板線」の貨物専用停車場、

現在の「塩谷町生涯学習センター」の近く)まで搬出していたことに由来する地名である。

いまは廃校となった熊ノ木小学校(現在は体験交流施設「星ふる学校くまの木」)よりさらに山に分け入った東古屋地区にはかつて分校があったが、この時代にはさらにもう一つ今回の処分場建設候補地にも分校があって、数名の子供たちが学んでいた。東古屋地区もいまではわずか 6 世帯が残るだけとなってしまい、この山間の地で生活し学んだ沢山の住民がいたことなど想像もできないだろう。



【写真 4:真夏の夜の「星ふる学校くまの木」】

ところが、燃料や山幸と平地の農産物の交換経済が主流ではなくなった現代でも、どうやら高原山のお膝元の山間部と平野とのつながりは、止めることのできない水の流れのごとく続いているようである。近年、東古屋の小さなキャンプ場が関東一円からの

来訪客で「静かな賑わい」をみせている。現代の都市的な生活からみれば何もない、むしろ寂れた山間地をわざわざ訪れては思い思いにひとときを過ごす人たちを、悠久の高原山が静かに見守っている。



【写真 5:秋の色づく東古屋キャンプ場】

高原山に守られた塩谷を取り巻く人の流れといえ、毎年の八坂神社の祭礼「お天王さま」にも言及しなければならぬだろう。現在では7月の第三土日に行われている「天王祭」（玉生地区）のことだ。本来は旧暦6月

15日に行われていたこの祭礼は、京都祇園祭の流れを汲む夏季の疫病流行を振り祓う都市型の祭りである。かつてお囃子(の太鼓)は、町内の氏子の長男たちによって担われていた。少子高齢化の影響で地方の伝統行事の存

続が危ぶまれている昨今では、塩谷と高原山に魅せられた人たちの力を借りて、祭りは賑やかに執り行われている。就職や結婚で町外に住む元町民た



ちだけでなく、かつて町の小中学校に赴任していた歴代 ALT (英語補助教員) たちも、毎年誰かが必ず戻ってきてくれる再会と交流の場となっている。



【写真 6:天王祭の様子】

時代の移り変わりとともに住民たちの生活が変化しても、高原山はいまでも地元の人々の暮らしを支える豊かな山というだけでなく、町内外の人々をも惹きつけてやまない特別な山なのである。神道では、高原山は八百万神々が坐(ま)します神聖な処であるとともに、この地域の故人の御霊の集う攸(ところ)でもある。もちろん、話は神道だけに限られない。高原山の裾野にある上土(浄土)平の地名からは、仏教の極楽浄土思想が反映されていることを容易に想像してもらえるだろう。そもそも尚仁(精進)沢とは、この聖域で修行に挑む者が身を清める神聖な水であるがゆえの名称

なのである。

環境省は、この神聖な山麓一帯から湧き出す奔流水をかつて「名水百選」に選定した。そして今度は、あろうことかそこに近接する豊かな森林に処分場を建設すると一方的に宣言し、住民の意見にまったく耳を貸そうとしない。2011年の福島原発の事故で拡散した放射能汚染によって、塩谷の住民は高原山の四季の恵みである山菜やきのこさえ楽しむことができず落胆している。追い打ちをかけるように、降ってわいた放射能汚染物質の処分場建設という鶴の一声に呆然としている。これ以上の重荷を住民はどうすれば背負えるというのだろうか。

山に降った雨や雪は、森にしみ出して林を流れ下り村や里をうるおして大河となって、やがて広大な海洋へとたどり着くのだ [……中略……] 山が栄えれば海がよるこび魚は肥える。深山幽谷をほとぼしる水源は神秘の栄養素にみちて、プランクトンやミネラルなどを運んで、溪谷や湖沼の淡水魚や里の農産物にも幸せをさずけながら大海に入ってゆく。(2008年9月7日「下野新聞」より)

塩谷町船生出身の作曲家の船村徹先生が提唱した国民の祝日「山の日」は、こよなく愛する高原山への思いからなのだ。なぜ、人々の生活を静かに見

守ってきた神聖な山に放射能の処分場を建設しなければならないのだろうか。



【写真 7:「第2回ふるさと高原山を愛する集い」で高原山について講演する船村徹先生(2014年8月塩谷町「尚仁沢は一とらんど」)】

西荒川と東荒川は、洪水と灌漑など多目的につくられた東西の荒川ダムがない以前は、その名の通り荒ぶる川そのものであった。それゆえにこの二つの川は二荒(にこう)川とも呼ばれていたのである。記憶に新しい2015年9月の大雨(関東東北豪雨)では、忘れ去られたその古名の由来を我々に容赦なく思い起こさせた。西荒川の源流域で大きな増水があり、環境省が固執する処分場の建設予定地一体には、計り知れない自然の大きな威力の

爪痕が残されている。このような場所に汚染物質の処分場を建設するなど、現代の技術的観点からみても到底理解できるものではないのではないか。それでも環境省は「安全だ」と空疎に繰り返すだけ。絶対安心、絶対安全などないことは、福島原発事故で日本中の我々がこの目で目撃し痛感したことではなかったのか。

「同じ過ちを繰り返すべきでない」。これは神々からの御宣託である。(終わり)